Japan Society of Research on Early Childhood Care and Education

OMEP 日本委員会「平和の文化と非暴力」プロジェクト報告

幼児をとりまく文化環境についての調査（2）

ー保育者の回答から読み取る暴力と非暴力ー

黒田瑛　加藤定夫　畠中徳子　瀧口優　瀧口眞央　近喰晴子　○森久子

（OMEP日本委員会）（宇都宮短期大学）（立教女学院短期大学）（白梅短期大学）（白梅短期大学非常勤）（山村学園短期大学）（富山短期大学）

はじめに

国際連合が2001年からの10年間を「世界の子どもたちのための平和の文化と非暴力の国際 10 年」と定め、ユネスコを始めとする世界の諸団体や機関が、その精神を広めるための運動を進めている。

国際機関であるOMEP（世界幼児教育機構）では、1946 年の設立当初から世界の子どもたちのために協力する目的をもち、ユネスコ精神に則って幼児期からの平和教育を進めてきている。

調査の目的

OMEP日本委員会では、チリでのOMEP世界大会('01)における決議事項「保育の質を高める」を受け、同年「平和の文化と非暴力」の保育を考えるためのプロジェクトを発足させた。そして第 56 回日本保育学会（'03）においては「幼児に平和を志向する力を」と題して自主シンポジウムを行い、文化としての環境に焦点を当てて、平和の文化教育についての問題提起をし、討議を行った。

今回は「平和の文化と非暴力」の観点から、幼児の遊び・玩具、絵本、テレビ・ビデオ等、幼児にとっての文化環境に関する調査を行った。この調査によって、幼児期の子どもが生活する場である家庭および幼稚園・保育所において、どのような児童文化財が活用され、その文化財に対して保護者や保育者がどのように考えているのかその実態を把握し、子どもが育つ環境における「平和の文化と非暴力」を推進していくことを目的とする。

本報告では、日頃４歳以上児の保育に携わっている幼稚園教諭・保育士による「平和の文化を育てる保育」の実態を、その具体的な姿（保育実践における様々な児童文化財の提供の仕方や、幼児の暴力的な場面におけるかかわり方など）を通して明らかにしようとするものである。

調査の方法

幼稚園教諭・保育所保育士へのアンケート調査

（1）調査時期

2003 年 11 月から 12 月

（2）調査対象

公立・私立の幼稚園・保育所で４歳以上児を担任している（したことがある）保育者

（全国のOMEP会員および会員の所属する保育者養成校の卒業生より）

（3）アンケートの構成

アンケートはフェイスシートのほか、大きく２つの部分から成っている。１つは回答者の勤務園または保育室での、４歳以上の子どもたちによる遊びや児童文化財についての質問であり、２番目は保育者自身による平和の文化教育全般についての考えを自由に記述してもらうものである。

回収数

配付数 541 枚、回収率 46.6%

調査項目

1．子どもたちの遊びおよび児童文化財についての質問（問１～15）

・子どもの自発的な遊び・おもちゃについて（問１～６）

・絵本について（問７～11）

・テレビ・ビデオについて（問 12～15）

子どもの自発的な遊び・おもちゃについての質問では、まず子どもたちが園で最近行っている遊びについて尋ね（問１）、人気のあるヒーローごっこ等での登場人物やその小道具について尋ねたり、積み木やブロック・粘土などで製作する物についてでは、暴力的と考えられる鉄砲やミサイル等を作っているかどうかを尋ねている（問２・３・４）。また保育室に備えられている遊具についても尋ねた（問５）。子どもの製作した物が危険を伴う物であったり、暴力的な遊びに対しては、それぞれの場合に保育者がどのように対応するかを聞いた（問６）。

絵本についての質問では、読み聞かせの基準やその理由について尋ね（問７・８）、実際にどんな絵本を子どもたちに読み聞かせているかについても記入してもらった（問８）。また、家庭への絵本の貸出し状況

NII-Electronic Library Service

Japan Society of Research on Early Childhood Care and Education

についても尋ねた（問10・11）。

テレビ・ビデオについては、装置の有無（問12）、視聴頻度、時間帯、番組名やビデオの題名等についても記入してもらい、園での子どもたちの遊びや生活への効果や影響を尋ねた（問13）。一方、家庭でのテレビやビデオ視聴が、子どもたちに具体的にどのように影響しているのかを、園での行動面や玩具等の選択傾向、生命の尊重等という価値観とのかかわりから、保育者が感じていることも尋ねた（問14・15）。

2．平和教育全般についての自由記述（問16～19）

特に幼稚園や保育所では、子ども同士のけんかへの対応が課題になる。今回の調査ではけんかへの対応についても尋ね、激しい口論の場合と暴力的な取っ組み合いの場合とに分けて、それぞれへの保育者の対応を聞いた（問16）。

連日テレビ報道されていたイラク戦争について、園で話題にしたか（問17）や、日頃から平和教育を意識した保育の取り組みをどのように行っているか（問18）についても尋ねた。また平和の文化と非暴力の観点（平和が守られ子どもの人権が保障されるという視点）から、今日の子どもの遊びや子どもを取り巻く児童文化環境について、日頃どのように感じているかについても記入をしてもらった（問19）。

調査で明らかにしたいこと

1980年にパリでユネスコ軍縮会議が開催され、最終報告書には「小さいうちから子どもたちに軍人、武功、戦争、征服を栄光化するようなビジョンを植え付ける傾向がある。マスメディアの圧力、戦争ゲームのおもちゃの販売が危惧される」と書き込まれた。これを受けて、ヨーロッパの幼稚園などからは、戦争につながるおもちゃが排除された経緯がある。

しかし日本では、好戦的な玩具を制限していない。今回の調査は、2001年から始まった「世界の子どもたちのための平和の文化と非暴力の国際10年」に、日本の幼稚園・保育所では非暴力にどのように取り組んでいるのかを、遊び・おもちゃ、絵本、テレビ・ビデオなどに焦点を当てて、保育者が用意した物的環境としての非暴力の実態を明らかにしようとするものである。

子どもたちの遊びの傾向では、今回は特にヒーローごっこに注目し、仮面ライダーやアバレンジャーシリーズの戦隊ものや戦いのシーンの多いアニメの影響が、子どもたちの園での遊びにどう影響しているのかを浮き彫りにするために、具体的に使用する小道具も記入してもらった。また、子どもたちが独自の遊具を製作できるように準備されている様々な素材を用いての製作遊びにおいても、暴力に発展するような場合があることにも言及したい。

絵本に関しては家庭と園での選択傾向に相違点があることが予想される。双方で読まれている作品名を明らかにすると共に、園からは絵本の貸出実施の有無にかかわらず、園で子どもたちに好まれている絵本の紹介や、身近な大人による読み聞かせの意義など、家庭への積極的な情報提供がなされるよう促したい。

テレビ・ビデオ等のメディアが子どもに及ぼす影響力は大きい。子どもの育ちを支える立場の保護者と保育者が連携し、子どもの生活をトータルに捉えるためには、保護者・保育者の双方が、子どもたちがメディアとどのように関わっているのかその実態を把握する必要がある。一方、子どもに悪影響を与えていると思われるテレビ番組やビデオの題名などを明らかにし、同時に保護者を対象とするアンケート調査結果の傾向とを重ね合わせながら、子どもたちの発達を支えるための映像文化を提言したい。

さらに自由記述の分析を通して、保育者が日頃保育の現場で感じていることを整理する。そこから、現在幼稚園・保育所で取り組まれている平和的な問題解決力の育成の様子や、今後平和の文化教育（平和を志向する人間を育てる）として取り組もうとしている内容についても明らかにしていきたい。

調査結果

当日資料として配付

参考文献

・「幼児と人権ー子どもを暴力から守る」
OMEP日本委員会　1999.5
・「暴力の文化から平和の文化へ」
平和の文化をきずく会編　平和文化　2000.5
・「脱暴力宣言」
平和の文化をきずく会編　平和文化　2001.8
・「２１世紀における保育」OMEP日本委員会　2002.3
・「平和をつくる教育」
早乙女愛・足立力也著
岩波ブックレットNO.575　2002.8

NII-Electronic Library Service